蔵の再考

―情報社会における記憶の継承―

Keywords
土蔵　登録有形文化財　活用
歴史的資源　継承

DZ17180　大滝晴香

1. はじめに　―地域に残された地域資源としての蔵―

蔵は江戸時代から物資の保存、火災などから守るために建てられてきた。そのため、大断面の木材を使用したり、土壁に漆喰を塗ったりするなど贅をつくして建てられたものが多く、現在でも各地で蔵の街と呼ばれる場所が残る。

しかし、その活用方法は資料館などに限られ、手入れの行き届かないものは老朽化が進み、解体されるものもある。

2. 研究目的

長い時代を人と共に歩んできた蔵は地域の共有財産であり、地域活性化のための資源となりうる。これらの蔵の特性を整理し、新たな活用方法を提案する。

3. 研究の位置づけ

3.1　分析

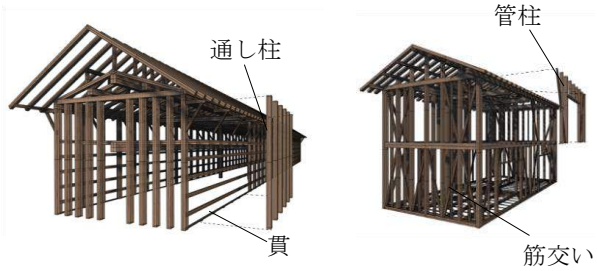


図1 蔵と在来木造住宅のモデル

	蔵	在来木造住宅
柱割	950	909
支え	貫	筋交い
通し柱	全て	4隅と主要部
開口部	通し柱を除いてまぐさで支える。	間柱を除いてまぐさで支える。
柱の高さ	5000	5400
火打ち柱	なし	あり
管柱・間柱	なし	あり

表１　蔵と在来木造住宅の特徴

(新建築2014 9月号[はじまりの美術館]の図面をもとに作成)

まず、蔵の構造や造りから、在来工法の住宅とは違った活用の方法が考えられる。図１のように蔵の柱はすべてが通し柱で構成されているため、天井高が大きくできる。また、梁幅方向に比べて桁行き方向が長くなり、中に入るとそのスケール感を感じやすいといった特徴もある。そして、1階建てから2階建てなど階層の変化がとりやすい。これらの特徴を活かした蔵にしかできない空間を作りだすことが可能であると言える。

次に蔵の伝播の流れ、時代と地域による形や用途の違いを調査した。調査からその地に与えられた地形などが起因して蔵の形が形成されたもの、地域でとれる材を使用して形成されたもの、地場産業などと結びついて機能してきたものなど、全国に存在する蔵の中でもそれぞれの特徴をもつことが明らかとなった。

この差異を生かした蔵の再生はその地方固有の活性化につながる可能性が見られる。

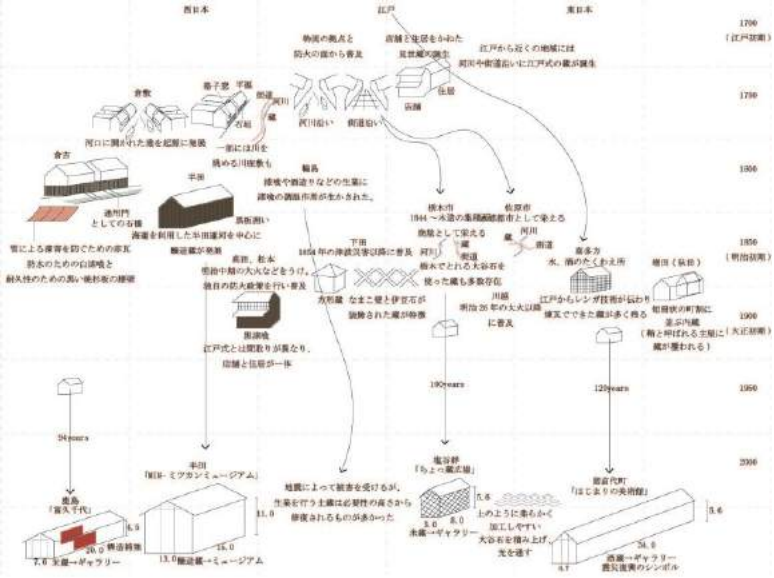


図2 蔵の展開分析図

(南関東・東海・中部地方における土蔵造町屋の普及実態とその背景/小沢朝江をもとに作成)

3.2　分析から

まず伝播方法から地方における旧街道沿いや河川敷沿いには現在でも蔵造りの建物が残っていることが分かった。

その中でも旧街道と河川の両方が残る地域では2本の主な人の流れを生む筋道が通り地域のコミュニティを形成していた痕跡が残る。

このような特徴をもつ地域をピックアップし新たな地域の流れを生む場所を敷地とした。

4. 対象敷地　－栃木県栃木市倭町－

4.1　敷地概要

栃木市内を流れる巴波川で水運が栄えていたことにより、川辺近くに多くの蔵が建てられており、今もその名残が残る。川の東には旧街道があり、道に連なった蔵も残る。

4.2　敷地分析

地域の人々にとっての蔵は見た目こそ親しいものの中の空間を利用する人は少なく、愛着をもつ機会が少ない。市内の人口も少子高齢化が進んでおり、若者が地元を離れる割合も多い。

地域の人々にとって蔵がより身近な存在となることで、この土地の歴史や文化に関心をもつきっかけとなる施設プログラムと建築を提案する。

図3 栃木市地図　(国土地理院)

対象地は、巴波川沿いに残る木材問屋を営んでいた蔵。

1840年から機能し、70年ほど倉庫などとして利用されていた歴史をもつ。

5.　設計趣旨

情報技術が発達した現代において、個人にとっての情報はデバイスの中で埋め尽くされ取り出す機会はまれである。そこで埋もれた情報を実体化する場を提案する。

市内で機能する印刷所や写真現像所などのものづくりの工場を集結し、人々がそれらを体験する。できた実体を蔵に保管することで人々の思い出をストックする。

大切な私財や物資を保管してきた蔵は新たに人々の思い出や記憶を保管する場として機能する。

対象敷地には文化財にも登録されている蔵が多く残る。それらを改修し、新たな建物を増築することで新たなランドスケープを形成する。

6.　計画概要

敷地面積：5,400㎡

延床面積：1,360㎡

6.1　プログラム

写真現像所　120㎡

活版印刷所　200㎡

ガラス加工所　140㎡

焼き物工場　240㎡

展示場　400㎡

カフェ　100㎡

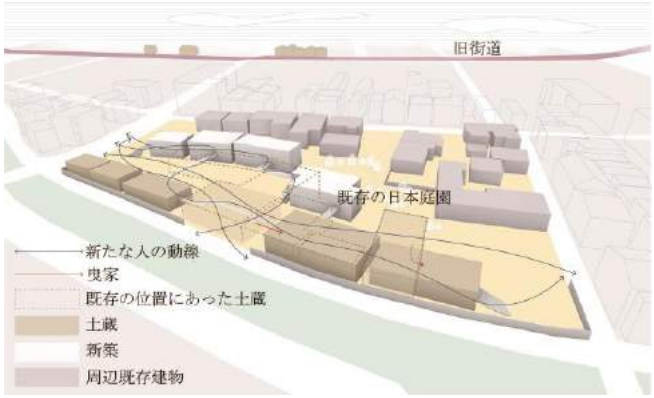
ワークスペース　160㎡

7.　設計手法

(1)　配置計画

河川側からのアプローチと大通り側からのアプローチを設け、既存の土蔵の一部を曳家することで今まで閉鎖されていた河川と土蔵の関係を取り戻し、新たな人の動線を計画する。

新築部分は周辺の環境を崩さぬように配置する。



(2)　構造

新築部分は土蔵の形態を残しつつも軽やかなマテリアルを使用しやすい鉄骨造を採用する。

土蔵は、その特徴的な構造体を見せる。

8.　終わりに

小さい頃から街に残る土蔵群を目にしてきたが、実際にその中に入ったり改めてその価値を認識したりすることは少なかった。今回の研究から全国に残る土蔵たちの価値が再認識され、地域の人びとと新たなかたちで結びついていってほしい。

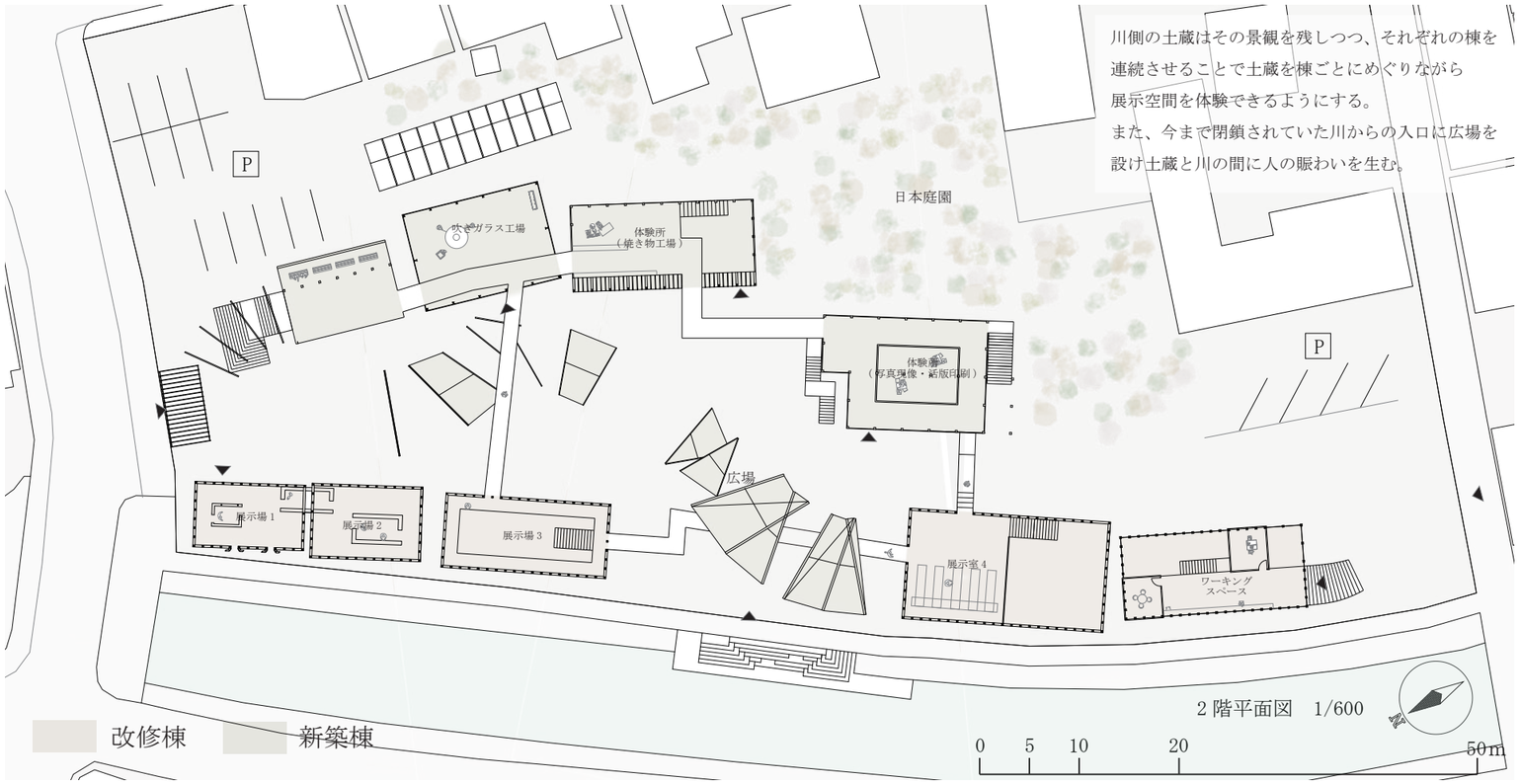
参考文献

1)　国土地理院　基盤地図情報

2)　新建築2014　9月号

3)　南関東・東海・中部地方における土蔵造町屋の普及実態とその背景/小沢朝江著

川側の土蔵はその景観を残しつつ、それぞれの棟を
連続させることで土蔵を棟ごとにめぐりながら
展示空間を体験できるようにする。
また、今まで閉鎖されていた川からの入口に広場を
設け土蔵と川の間に人の賑わいを生む。

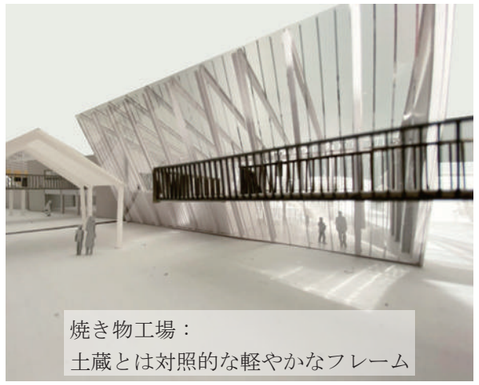


2 階平面図　1/600

全体模型：昔ながらの土蔵と新築の融合

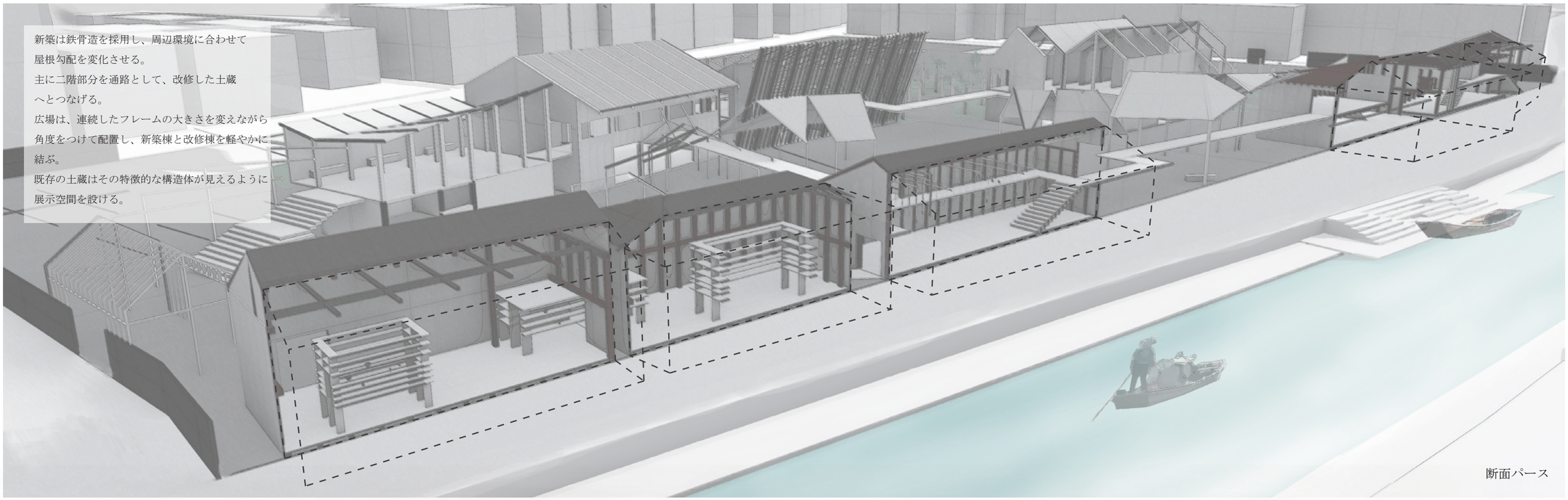
川から見た広場：
広場から街に賑わいがあふれだす。

日本庭園から見た写真現像所：
開いた新築建物の 2 階から緑を感じる。

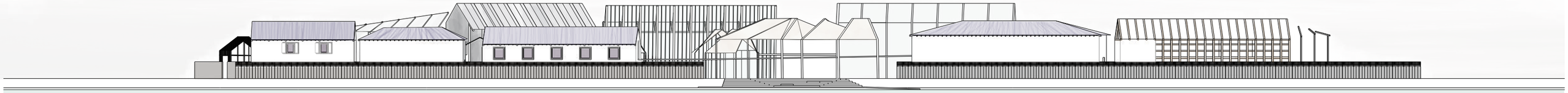


焼き物工場：
土蔵とは対照的な軽やかなフレーム

新築は鉄骨造を採用し、周辺環境に合わせて
屋根勾配を変化させる。
主に二階部分を通路として、改修した土蔵
へとつなげる。
広場は、連続したフレームの大きさを変えながら
角度をつけて配置し、新築棟と改修棟を軽やかに
結ぶ。
既存の土蔵はその特徴的な構造体が見えるように
展示空間を設ける。



断面パース



東側立面図　1/400